

「右手にスコップ、左手に缶ビール」が活動の原動力

NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・都留文科大学特任教授 渡辺 豊博

(これは、平成 28 年 3 月 14 日開催「第 11 回関西元気な地域づくり発表会」の講演内容を編集したものです。)

論 点

ボランティア活動は自分のためにやる
現場には「社会の真理と現実」がある
公狂事業から公協事業へ、そして、交響事業へ
区画整理事業などの大きな公共事業ではまちを活性化できない
グラウンドワーク三島の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」
市民・NPO・行政・企業とのパートナーシップを形成
営利事業と非営利事業の 2 つの事業をうまく運営する組織
多様な市民活動を 3 つの戦略的アプローチで展開
市民力で環境再生から観光振興・空き店舗ゼロのまちへ
多様な市民活動の現場が回廊性を創る
「水の都・三島」の原風景と原体験の再生がコンセプト
市民力・地域力を結集して源兵衛川の清流を再生
活動の目標・指標を持ってまちづくりを展開
ふるさとの森・松毛川河畔林の整備
儲けるNPOビジネスの経営と多様な市民活動を展開
境川・清住緑地・大湧水公園の整備計画を提案
大場地区里山整備計画を提案
儲かるNPOビジネスを展開
皆の力でまちを地域を元気に

ボランティア活動は自分のためにやる

私の演壇から来場者の皆さまが遠いので、どんな人たちが聞きに来てくれたのか、よくわかりません。しかし、大変、元気そうな、少し生活と公益的な活動に疲れたような、疲れていないような、雰囲気の方々に集まっていたように、ありがとうございます。皆さん、とても、元気そうですね。

公益的な活動に、日々、頑張っていらっしゃるとのこと。「よっぽど個人的な自由な時間があるのか、お金が余っているのか、生活と心に余裕があるのか」というような感じの方々が、今回の私の講演に集まっていたようにですね。

私自身は、まちづくりに関して、25 年にもわたり、やり続けてきました。しかし、時々、「何のためにやっているのか」という、素朴な疑問や不安を抱くことがあります。長く活動を続けていくためには、強い信念と哲学を持たないと疲れてしまい迷いが大きくなります。NPOやボランティア活動を含めて、「人のためにやっている」と言われる人が多いのですが、私は、少し違和感を感じています。

私の考え方は、「自分のため」にやっているのではないかと考えています。自分が心地よく、素敵で安全、安心なまちに住んでみたいと思う人が、先頭を切って、「自己犠牲・奉仕」の気持ちで、公益的な活動に関わることを目指しているのではないかと思います。自己犠牲だと思ってしまうと疲れちゃうので、社会の中でもう一人の自分を発見し、多様な活動を通して自己研鑽していく活動ではないかと考えています。

現場には「社会の真理と現実」がある

現実の社会には、「光と影」が存在します。その混沌とした難しさの中で課題解決のために、いろいろと頑張ることは、「NPOの永平寺」とか、「大人の学校」としての機能と要素が含まれていることから、公益的活動はつらくて面倒くさいものです。大変なことは、地域住民の合意形成と協力体制の構築です。住民は、よくしゃべり口が達者な方が多いようです。しかし、なかなか活動現場には来てくれません。

今、国会では、参議院予算委員会が開催されていますが、国会議員は口が達者な方が多いようです。彼らは、現場に頻繁に出かけているのでしょうか、出かけたとしても短時間しかいないのではありませんか。被災地の仮設住宅で、安倍首相は生活したことがあるのでしょうか。1ヶ月ほどお住みになったら、カビやダニの発生がひどいことなど、現実的な住環境の厳しさや実態を的確に理解していただけるものと思います。

3月11日、皆さんは、どんな日か、ご存知ですよ。実は、私は被災地に今まで80回ほど行っておりました。地球を2周半ほどした勘定です。特に、石巻市に多く通っていますが、三島市から600kmの距離があります。往復1,200km、時間的には片道で約8時間かかります。80回も通っていますので、被災地の現状は、承知・理解しているつもりです。

私が、地域づくりに、25年間も関わってきて思うのは、被災地を含め、現場に頻繁に来て、支援活動を継続的に続けている人が少ないことです。総論的な世間話や海外での先進的なまちづくりの事例紹介は、専門家や大学教授から提言、紹介、推奨されています。しかし、それらの知識を現実的に、どのように地域で活用していったらいいのか、十分に理解できず、成功事例は少なく抽象的・総論的な話ばかりです。課題を抱える現場に来て、一緒に汗を流してくれる人が余りにも少ないわけです。

そういう意味では、地方は、高齢化、少子化という潮流の中で、ますます人口規模が少なくなり、地域が脆弱化していきます。よっぽど現場に魅力を作らないと、地方の応援団が少なくなってしまうし、自分の後ろを振り向くと、奥さんもない、こない、当然こない、やっぱり、こないになってしまいます。

私も以前、「おはよう川村龍一です」のラジオ番組で、土曜日のパーソナリティをやらせて頂いたことがあります。2回にわたって、富士山頂から、川村さんと登山して現場から放送したこともあります。

私は、富士山には今まで85回ほど、中学校2年生の時から登っています。富士山のゴミやし尿問題などの環境問題については、現場の実情を詳細に知っているつもりです。しかし、実際、富士山に登って、ボランティア活動に来てくれる人は少ないですね。まあ、富士山の現場に来るのは、大変ですけどもね。

しかし、多様な環境問題や社会的な事件は、現場で起きていますので、現場には「社会の真理と現実」が存在しています。現場に来なければ、社会の真理と現実を、ボランティアの哲学や思想も、社会人としての社会的な役割や義務も十分に理解することは難しいと思います。自分が、今、社会の中で、どのような立ち位置にいるのか、地域がどのように変化しているのか、人々は一体今何を求めているのか、そのような生活者の真実の思いや悩みを正確に理解・認識・把握することは難しいと考えています。

公狂事業から公協事業へ、そして、交響事業に

今回の講演会の主催者は、国土交通省さんですが、私は8年前、静岡県庁に35年間勤務しており、測量士などの資格を取得している農業土木技術者です。そういう意味では、「行政の暴走」を、先頭を切ってやってきた行政マンの1人でもあります。

当時、「公共事業」の呼び方を変えた方がいいと、上司に提案したら、「ジャンボ、なんでそんな呼び方をする必要があるんだ、失礼ではないか」と怒られました。「公が民から離れ暴走しているので、公が狂うと書いて公狂事業と呼ぶべきです」、「これからは公が民と協働する公協事業の姿勢に変わるべきであり、最終的には交響事業が理想形です」と反論しました。

公共事業の理想的な姿は、「交響曲」的な事業です。私は、高校時代、ブラスバンドでホルンを吹いていました。オーケストラ規模にもなると、1人が音階をはずすと、1つの音楽を奏でられません。全体として、統一された音にしなければならないのです。

人は、どんな状態、立場であろうと、基本的には地域で生活している住民であり、弱者であろうと、お金を持っていようと、太っていようと、痩せていようと、美人であろうと、みんな一緒です。一緒になって、地域というものを考えられるような「意識の変革」を、今日、ここに来ていらっしゃる人は、どうやってリードしていくのか。すなわち、「人間マネジメント」を理解していなくてはなりません。この力を身に付けないと、現場の1人1人の意識を変えることはできないのです。

まちづくりとは、「コンクリートに魂を入れる」仕事だと考えています。コンクリートを使用した施設づくりについて否定・批判しているわけではありません。施設に地域の思いや個性、特性、文化、歴史などが特徴的な魅力や個性として含まれていますか、皆さまが関わりを持ったものですかと聞きたいのです。

何か目新しい施設を造れば、住民の際立った評価を受けられるということなのでしょう。会場近くの大阪城は当然、際立って建物は立派ですが、豊臣秀吉の評価は、当時、戦乱の地方統治の社会的な「統治の仕組み」を作ったことではないでしょうか。

武田信玄には、彼を支える優秀な武将が沢山いました。彼らを約30年かけて育てあげたのです。ところが、武田信玄が亡くなった後、息子の武田勝頼が、嫉妬と疑念から、武田軍団の知恵者・パートナーを殺していきました。その結果、短い期間で、天下取りも可能な無敵軍団の武田家は崩壊していきました。

「人は石垣」と武田信玄が言っていた割には、息子の勝頼は「人はただの石」にしか見えなかったのですかね。それに、嫉妬、誤解、批判、足の引っ張り合い、これらは、本当に非生産的な活動です。非常に不条理にして、非生産的な国家のしくみ、これをそのまま、地域のしくみに転換すると中央集権型の仕組みになり、結局、地域住民の主体的な意思は醸成されず、依存と甘えが蔓延して、発想は貧困化・硬直化し、地域全体が衰退して行くという危険性があるわけです。

区画整理事業などの大きな公共事業ではまちを活性化できない

私が承知している範囲では、区画整理事業をやって成功した地区は少ないと考えています。駅前を整備したらサラ金のお店が増えて、特性のないまちになってしまった事例が多いと思います。例えば、静岡市から浜松市までの東海道沿線のまちまちでは、区画整理を切っ掛けとして、まちの特性や歴史性を壊してしまったのではないかと考えています。実際、整備後に人通りは少なくなり、多くの住民は近隣の静岡市に買い物に出かけ、沿線上のまちから買い物客が、静岡市に吸い上げられてしまっています。皮肉にも静岡市は、発展し、沿線上の江戸時代からの歴史的なまちは、衰退していきます。

そういうことでは、地域に根を張り、地域の特性を理解して、ドロドロとした人と人との関係を理解しながら、さて、皆さまの故郷をどうしていくのか、今、勝負どころです。演壇から見ていると、人生の時間が残り少ないような人が多いような気もしますが、この大変な活動を続けられますか。

というわけで、凝縮して効率的に、物事を的確に実行していかないと、皆さまの思い出話、趣味嗜好のNPO・市民団体の活動になってしまうんじゃないですか。皆さまの活動を、バトンタッチする人がちゃんといますか。そんなことどうでもいいさ、俺の年代で燃え尽きればいいのさ。カッコいい、考え方ですね。日本は、過去、零戦や人間魚雷回天をつくり、玉砕していった国です。NPOも同じように、玉砕するのですか。何にも手だてってものがないのですか。よくそれで大人の世界で生きてきましたね。本当に、失礼で不遜な話をしていますので皆さんに謝ります。

そろそろ、怒りでものが、飛んできそうですね。大丈夫ですよ。飛んできたら投げ返しますから。そういう意味では、活動の前段の話だけで、講演会を終了してしまったこともあります。質問で、「すいません、

具体的な活動はどのように対応しているのですか、詳しく教えてください」と聞かれたこともあります。というわけで、そろそろ、具体的な話に移ります。

グラウンドワーク三島の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」

「グラウンドワーク三島」の諸活動についてお話しします。活動の説明には、わかりやすい言葉が必要です。皆さんもポスターセッションで活動を紹介してくれていますが、誰にでもわかる「キーワード・合言葉」をお持ちでしょうか。活動内容について、長く説明しないと、どんなことをしているのかよくわからないような活動は他人には思いが伝わりにくいものです。ところで、活動の主体者自身が、自分たちの活動の真意を的確に理解しているのでしょうか。明快なキーワードで説明ができることがポイントです。

グラウンドワーク三島は、「右手にスコップ、左手に缶ビール」が合言葉です。冗談ですが、今は少し変わりました。「左手で缶ビールを飲み過ぎで、痛風になってしまい、今は、左手に焼酎」に変わりました。活動の経過とともに、合言葉の表現も変化していくものです。

さて、私たちの活動はグローバルであり、毎年、夏には日韓の若者交流を実施しています。韓国の大学生や私のゼミ生、ボランティアに来ている高校生など、活動メンバーは多彩です。借りている耕作放棄地で、三島そばの復活や22品種の野菜を作っています。とにかく、日本の学生でも韓国の学生でもイギリスの学生であろうと、農村地帯に行き現場で汗を流し、終わったら、温泉に行き、その後、参加者同士でお酒を飲み、作業を反省し交流するという非常に単純な活動です。それが、私たちの合言葉の意味です。

グラウンドワーク三島の役割は、「調整・仲介役」の役割です。今、行政は結構、市民に近づいてきています。相互の関係は強まってきていると思います。企業は、昔から地域の中で、それなりの力もあり、行政との関係も持っています。市民と企業は、公害問題で対立した時代もありました。三者の関係を考えますと、それぞれにすごい能力と専門性を持っています。問題は、相互の連携が希薄で、バラバラの関係だということです。いや、うまくやっているよ、うまくいき始めているよと、いう地区はもちろん承知していますが、もっとうまく行く方法というものを考えたらいかがでしょうかという提案です。

人は、他人のことを批判していると、非生産的な関係になります。何もいいことはありません。しかし、人を褒め上げると、相手は、悪い気持ちにはなりません。これは、あくまでも、お互いが、お互いを褒め合う、建設的な相互関係です。しかし、お互い同士で、ほめあげると気恥ずかしい感じですよ。ということで、相互の真ん中に、それぞれの長所と問題点を知っている中間支援的な団体、インターメディアリーという役割を担う団体の存在と役割が重要になってきます。

市民・NPO・行政・企業とのパートナーシップを形成

グラウンドワーク三島は、25年前から、この「調整・仲介役」の役割を果たしてきています。行政もできなかつたこと、市民もできなかつたこと、企業もできなかつたことを、マイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えて、相互に良き関係を構築していくのです。

例えば、三島市では、今から50年前頃から、上流地域に、多くの地下水利用型の企業が進出しました。その結果、次第に、「水の都・三島」から、地下水が消えました。市民は川にごみを捨て、まちを汚しました。そして、行政と政治の悪口を言っていました。行政は言い訳ばかり言っていました。市民に頻りに情報公開せず勝手に暴走し、やや無駄な非効率の公共施設を造ってきました。この関係にメリットがありますか。すべての経費は税金で賄われています。そういう意味では、この三者の関係を一体化して有機的に連携させ、環境再生活動に着手したのが、グラウンドワーク三島なのです。

地下水利用型の企業に対しては、水質的に問題のない使用済みの冷却水を、汚れた源兵衛川に供給・補給してもらうように提案、要請いたしました。市民はごみを捨てず、川に入ってごみ拾いを始めました。行政

は、広く市民の意見を聞いて、市民の欲しい公共施設を計画し造り始めました。グラウンドワーク三島は、これらの関係者を有機的に連携させるためのコーディネートの役割を果たしました。

このコーディネーターの役割には、税金はかかっていません。立派なことをやろうとすると、お金がかかるというのは嘘・思い込みです。立派なことをやろうとする時は、お金を持っている人を飲み屋に行き探せばいいのです。結構、貧乏そうに見えても、公益的な活動を理解し寄付してくれる人はいます。

金遣いが粗そうでも、実際は、借金まみれの人もいます。ですから飲み屋で人の話を聞きながら「この人、金を持っているな」、「寄付は難しいな」、「金は持っているけど少し心が貧しそうだな」ということを、皆さんはリサーチする力を持たないと、活動を大きく成長、発展させることは難しくなります。懐に入り、真綿で首を絞める、そして吸血鬼のように、その人の「善意の意識」に近づくこと、これは公益的活動を発展させていくための特徴的な取り組み手法・ノウハウだと考えています。グラウンドワーク三島は、そんな楽しい社会的な役割を果たしてきています。

営利事業と非営利事業の2つの事業をうまく運営する組織

グラウンドワーク三島の組織の仕組みについて説明します。平成27年度の年間予算が、1億円ぐらいで、職員が11名います。プロジェクトは、現在、60プロジェクト。コアスタッフが13名、スタッフが約130名います。20の市民団体、8,000人が集まったネットワーク組織であり、20団体から4~5人のスタッフが出てきており130名になります。

このセンターの仕事を事務局と私が担い、プロジェクトごとにコアスタッフが1人入り、スタッフが5人入り、地域住民が入っています、これが60箇所になろうと100箇所になろうと何の問題もなく、活動を展開して、具体的に地域の課題を解決していく、そういう、とてつもない潜在力を持った組織です。

ですから、何かを成そうとする時は、仕組みが大切なので、どういう組織体制を作り、どういう責任の所在を明確化するかをしっかりと考えなければいけません。これはグラウンドワーク三島の仕組みですから、本当にいいのか、悪いのかを、大阪型か地域型で考え、創るのです。当然、活動は大事ですが、並行して、組織を運営する力を、リーダーは身に付けないと、持続的・発展的な活動展開は難しくなります。

リーダーの能力・専門性で大切なことは、ビジネス力です。やはり、資金を確保できるリーダーは社会では高位の地位につきます。資金を稼いでくる人が、リーダーになります。NPOだってリーダーの役割を果たしたいと考える人は、資金を安定的に確保できなくては不適といえます。

もしも、資金を確保することが難しいことなら、活動を支援してくれる人を紹介すればいいのです。人を紹介できないなら、的確な情報を持ってくればいいのです。いろいろな必要事項を持ってこられる力を身に付ければいいのです。これは「専門性」であり、その力を持っていたら、効率的に組織を運営管理することができます。

NPOが、役所のように組織を縦割りにしてしまったり、役所の天下り組織のように有名無実の理事会にしたりして何になりますか。グラウンドワーク三島は、頻繁に理事会を開催しています。会議が終わったら、間違いなくみんなで飲みに行きます。しゃんしゃん理事会では、組織が硬直化していきます。

多様な市民活動を3つの戦略的アプローチで展開

現在、活動開始から24年が経過しました。そして、20団体と8,000人が参集し、実践地は60箇所。三島市の人口は、11万人で、町内会は124、本会が関わっている町内会は58、約48,000人の町内の皆さんと連携をしています。市民活動は、町内会の普通のおじちゃんやおばちゃんとの連携なくして、組織の足元や足腰は強化できません。

ある問題意識を持った人たちがいる範囲内のことに対応していればもちろんいいのですが、それでは、地域を具体的に変えることは難しいと思います。地域に住んでいるのは、おじちゃんやおばちゃんたちであり、その人たちと連携しながら、その人たちが抱えている問題を真摯に聞き取り、皆さまの問題意識の共有化を図り、活動分野と整合性を図りながら、その活動分野の範囲の中で、何がそのおばちゃんやおじちゃんのために役立つのかを真剣に戦略的に考えていかなければ地域を変えることはできません。

私たちの活動の仕組み、理念として、「**戦略的アプローチ**」があり、**3つのアプローチ**があります。

1つ目は「**ボトムアップアプローチ**」です。とにかく現場から、下から地域を変えていくのです。これは、結構大変なことで、辛い活動です。地域に入って、住民の合意形成をしないと、現場から物事を変えられず、課題も解決できません。時間もかかり、大変です。代行の料金や飲み代が必要となります。こんな馬鹿らしいこと、やめた方がいいかもしれません、好きなことだけをやっているならば幸せかもしれません。合意形成に、2年半から3年半もかかり、大変ですからやめた方がいいと思います。

昔、公務員は、現金でボーナスをもらっていましたので、その写真が新聞に掲載された時に説明会に地域に行くと、「お前いいよな。こんなボランティアをやっているもボーナスをもらえて、俺たち住民は命がけで生きている中で、ヒマだから、ここに来ているんだろ」と批判されるわけです。

そんな罵声が飛び交う場所に、公務員がボランティア活動の一環として、何十回も出向きますか。行かないでしょう。公務員は用事がある時しか、現場には行かないわけです。NPOは用事がなくても、行くわけです。この意識の違いは大きいです。用事がなくても来た人とは信頼関係が生まれやすい。用事があるから来た人は用事を済ませれば関係は終わりです。仕事で来ただけであり、当たり前でして、信頼関係が生まれますか。NPOの特性・特徴は、用事がなくても、忙しくても、現場に行きます。そういう力と余裕を持たなければ、多様な人たちとの信頼関係はつくりにくいと思います

2つ目は「**パートナーシップアプローチ**」です。みんなでやれば怖くないということですから、一つの団体でやろうとするのではなくて、いろいろな団体と連携を取りながら、お互いの特性を認め合いながら、得意技を持った人たちをうまく使っていくのが、パートナーシップアプローチです。

3つ目は「**ホリスティックアプローチ**」です。これは包括的・総合的というのですが、最近、イギリスにおいては、どこのNPOにいても、ホリスティックという言葉が使われます。意味は、行政の基本的な役割は、人の心を変える仕事であるということです。行政の仕事は、お金を補助金として配分し、公共的な施設を造ることだけではなく、地域の人たちの心を変える仕事だということです。

イギリスでは、過去、長く、毎年3千人近い移民を受け入れ、今では250万人もいるのではないかとわれています。人口は、6,000万人弱ですので、移民が大きな要素を占めています。多くは、生活保護や社会保障に依存しているので、自立してもらわないと国家の資金的な負担が増加してしまう。その対策を担っているのが、NPO、イギリスではボランティアセクターです。

社会に依存せず、自立して働くような意識に心を変えなければならぬのです。犯罪を起こさせないこと、売春、窃盗、強盗、エイズ、小学校の妊娠問題など、社会的な課題が山積みです。大人や子どもたちの心を変えなければ国がもたない。そういうことを、国が率先してやろうとしています。

日本の被災地での対策を見ると、鉄道復旧や高速道路を早く整備すれば復興が成功だと主張しています。現在、被災地の海岸線に高さ7m20cmの海岸堤防を、200km以上も建設していますが、何かが大きく変わるのでしょうか。素敵な白砂青松の海岸が破壊されてしまい、故郷の原風景はどうなってしまうのでしょうか。私も現場の実態を見て、血の気が引きました。皆さんも1回、その現場を見に行ってください。高さ15m30cmの海岸堤防もありますので、どういうものか。東北復興の成功が世界の見本になると、安倍首相も息巻いていますが、私には視点のずれを感じており、その効果を信じられません。

市民力で環境再生から観光振興・空き店舗ゼロのまちへ

三島市では20年前、観光交流客数が174万人、2014年で620万人。あと5年で1,000万人を超えられればと期待しています。約280のお店がある中心商店街には、空き店舗はほぼゼロです。疑いを持つ人は、三島市の現場を見に来てください。あまり問題がないから、古くからの実績があり、斬新さが弱いから、なかなか、テレビで放映・紹介されず、地道に着実に発展していています。

グラウンドワーク三島では、現在までの実践地が、60箇所以上もあります。まちづくりの基本的な考え方は、まず「面」を作ることから始めるのではなくて、課題を抱えた「点」を改善することから始めていきます。地域での問題は「点」から始まります。点・現場に関係している「人」から始まります。夫婦関係もそうでしょうか？男女関係もそうです。みんな人が関わっています。人と人とが、協力し合えば、点の問題は解決できます。しかし、この点の問題を解決することは、人が絡み、意外と難しいものです。

いろいろとプライバシーの問題もあり、複雑怪奇です。人と人とが引き算、対立すると、地域の中に膿・問題が噴出してきます。美しい湧水池にごみが捨てられる、素敵な水辺に雑排水が垂れ流される、歴史的な鎮守の森が放置され日陰になってしまうなど、管理に地域住民の手が届かなくなると問題が起きます。よく見ると考えると、それが地域の大切な宝物だったりします。文化的・歴史的な場合もあります。

大切にする必要については、多様な考え方が現出して、意見の対立があり合意形成が困難になります。意見統一が一番難しいのです。だから、行政は議論を避ける傾向があります。なぜ避けるのか。行政の土地ではないからです。民地を行政が整備することは、公共用地として買収する限り、難しいと思います。

地域を安全に美しく維持していくことは、市民の力を結集する方法が、課題解決への早道です。市民共通の協賛の声と具体的な行動がなければ、地域の力にはなりません。この力は、行政がつくることはできず、生活者へのきめ細やかなサービスの提供は、行政は困難です。皆さんは、行政はスーパーマンだと思っちゃるんですか。膨大な国家的な借金を抱え、課題の処理・対応能力は脆弱化・硬直化しています。そんな意味では、地域での小さな課題解決のためには、行政が機動的に動けなくなっています。

そこで、行政の手が届かない社会的な隙間に入り、人間的なサービスを提供していくのが、NPOの役割だといえます。皆さんの役割と責任は大きいのです。素敵なまちがつかれないと思ったら、そのまちを離れるのも一つの方法です。この流民は、江戸時代や戦国時代にもありました。私は、これから流民が増えてくると思います。あるまちは社会保障が充実しているとしたら、そちらのまちに人々は移動します。

多様な市民活動の現場が回廊性を創る

グラウンドワーク三島は今までに、沢山の多種多様な地域改善活動に取り組んできました。点を改善して、川と道路の線で結べば面・まちになります。私たちの活動は、点から線、線から面に、時間はかかりますが変えてきました。どうして現在、620万人もの観光客が来ているのと思いますか。調査してみると、多くの観光客は、一人で10回以上来ている、リピーターです。ですから、ベースとなる観光交流客数は50万人位なのかなと思います。10回かけますと500万人近くになります。

リピーターの理由は、再度訪問したいと思う、多様な観光地・見学先があることではないでしょうか。具体的には、「水の仕掛け」と呼ぶ、素敵で魅力的な観光地が街中に点在しているのです。1回だけでは行ききれないのです。「春夏秋冬」が素敵なのです。それぞれ雰囲気違います。そういう個性的な魅力は行政が作ったわけじゃないのです。市民が主体となり再生・整備したものであり、それが魅力的な観光地となり訪問してくれる観光客が増えたのです。

賢明に地域のために、市民が協力して、頑張っ、後ろを振りむいてみたら、すごく素敵なまちができていた。「まち磨き」につながったのです。「すごく良いものが街中に残っているね、これを観光資源に使わなかったら損だね」ということが切っ掛けとなり、今、相乗効果により有機的に物事が動き始めています。三

島市では区画整理はいままで実施されていません。江戸時代の街図を今のまちに重ねると、時代の経過を超えて、全くそのままのまちなのです。

ところで、組織体制ですが、グラウンドワーク三島が真ん中に存在していて、環境団体や大学、その他の団体、三島市、企業が207社等と連携をしながら、全体力を機動的にまちの課題解決にぶつけているというのが仕組みです。

「水の都・三島」の原風景と原体験の再生がコンセプト

グラウンドワーク三島の活動のコンセプトは、環境再生を行い、合わせ、地域再生をしようということです。さらに、農業再生をしながら、その農産物を販売する「NPOビジネス」を創業するというのが、私たちの24年間の活動の蓄積、経過です。

市民力・地域力を結集して、環境再生を成し遂げた事例として、源兵衛川の水辺再生があります。この川は、1960年代頃は、富士山からの湧水が流れて豊かな水辺自然空間を形成していました。

しかし、1964年の東京オリンピックが開催された高度成長の時代になると、上流側での地下水の汲み上げにより、川から湧水が消え、ごみが捨てられ、ヘドロが溜まり、悪臭を放ち、油が浮き、魚は死にました。この状態が、約26年間にわたって続きました。

グラウンドワーク三島を設立した理由は、この汚れた源兵衛川を、管理者である中郷用土地改良区が臭いから埋めてしまおうと計画していました。農林水産省の水質汚濁防止事業を導入して、埋めてしまおうと考えていました。そこで、とんでもない暴挙だ、昔の川に戻すべきだという、思いを持った三島っ子が集まり設立したのが、グラウンドワーク三島です。

皆さんのまちにも、知らないうちに、厳しいインパクトがかかり、危機的な局面に迫いやられている場所はありませんか。日本中に、そのような地域課題を抱え、悩んでいる地区が多く存在していると思います。私は、この厳しい地域課題については、何にも難題ではないと考えています。地域の人々が一体化して、立ち上がるためには、市民のパワーが必要です。それが危機意識であり、切迫感や追い詰められた気持ちです。人は追い詰められないと爆発力や集中力が発揮できません。逃げたい人も避けたい人もいます、自分の生活を大切にしたいから参加したくない、できない人もいます。

だから、やろうと決意した人は、命をかけてもらわないとうまくいきません。そんなに中途半端なものではありません。事務局長や専務理事なんて、責任ばかりが重く、辛いことも多いので、絶対にやっちゃいけません。そんな暇と心の余裕があるなら、まずは、早く家に帰って、家族の生活を大切にしたい方がいいんじゃないかと思います。私は、9つのNPOの事務局長を担ってきただけです。こんな馬鹿らしく、あほらしく、儲からないことは、やめた方がいいかもしれません。

重責がかかりますよ。人がイベント中に事故で死亡したら、多分、事務局長の責任者として裁判・訴訟の相手になる場合が多いと思います。この厳しい事実を承知していますよね。敗訴になると、自分の財産を失ってしまう危険性も内在しています。このリスクを、承知・覚悟していらっしゃいますよね。そのぐらいの強い覚悟と意思を持ち合わせていないと、源兵衛川の水辺再生はできなかつたと考えています。

そんなわけで、グラウンドワーク三島は、農林水産省の補助事業を白紙に戻し、もう1回、原点からのスタートを開始しました。まずは、私が1人で汚れてしまっていた源兵衛川のごみ拾いから始めました。少しきれいになってから、子どもたちや地域住民に声をかけ、さらに、ごみ拾いを続けました。1年半の間は、僅かの人しか応援してくれませんでしたので、数人で地道に、ごみ拾いを続けました。

しかし、1年半位が経過すると、「お兄ちゃん川の中で何やってんの」とか、「ご苦労様、コーヒーを飲んでよ」とか、「ケーキあるよ、食べませんか」とか、この不景気の時代に、ケーキを持ってきてくれました。とんでもないバケツみたいなかかいケーキを持ってきたこともあり、その時には、2人しかいなかったのに、

2人で食べました。ビール飲みながらケーキを食べました。コーヒーの中に、ビールを入れたり、ケーキに穴掘ってビールを入れたりして、とにかく、スプーンで食べたこともありました。

だから、私はこんなに太ったんですかね。あのおばちゃんたちの責任です。しかし、食べないと申し訳ないので食べました。というわけで、いろいろな人が、支援者・理解者として、だんだんと集まって来ました。静かな池に石を投げる人は大変ですけど、その後の反応、評価は面白いですよ、その微妙な反応に驚きます。人は、何かに興味を持ってくると、無関心の臨界点を超え、前向きな胎動・微動が起きます。

市民力・地域力を結集して源兵衛川の清流を再生

とにかく、とにかく、かなりの回数、源兵衛川の水辺再生の方法論について、多様な関係者と話し合いました。源兵衛川の流域には、13の町内会があり、約2万人の住民が住んでいます。約3年間にわたり、約200回の話し合いを持ち、延べ2万人の住民と話し合いました。「この川をどうしたらいい、ああしたらいい。なぜ汚くなったのか、昔はこういうトンボがいた、魚がいた、水神さんがあった、ここで水が湧いていた」など、いろいろな情報を集めて、それを整理・分析・評価し勉強会を開催して、多くの住民に源兵衛川に関心と興味を持ってもらいました。

年間で87回の勉強会を開催したこともありました。これは大変でしたが、多様な意見が出て、今では楽しい思い出話になりました。勉強会が終わったら、よく地域住民と飲みに行きました。酔っぱらってしまい、誰が金を払ったのか、私はほとんど支払った記憶がありませんが、支払の雰囲気になった時に、便所に行って避けるという特殊な回避能力を身に付けたのも、これらの勉強会の繰り返しからです。皆さんも真面目に生きたら損をするかもしれませんね。

努力を続ければ、汚れていた源兵衛川も、とてつもなくきれいになるわけです。これまでに、まったく何にもなかった川に「水辺の散歩道」を作り、自然植生を増やしました。今では夏になると、約千人以上の子どもたちが川遊びをしています。近くの水辺の空間に、おじいちゃんやおばあちゃんが、にこにこしてベンチに座り、孫が裸になって泳いでいます。この光景・姿が、私たちの目標・夢だったんです。

人は、やろうと強く思えば、何でも成就することができると思います。無理だと諦めてしまったら、その時点で物事は終わりです。もし当時、当初計画のように、源兵衛川を暗渠化して、川に蓋をしていたら、「水の都・三島」の原風景は傷つき消滅していたと思います。私も三島を捨て、大阪に来ていたかもしれません。そういう意味では、私たちの発想と行動力、方向性は、適切だったと自負しています。

ボランティアとしての達成感・満足感は、このような自己満足の気持ちです。「俺がやった」と思う気持ちが、まちを愛する「愛郷心」につながっていきます。現在までの24年間で三島市長は、4人変わっていますが、みんな「源兵衛川は僕がやった」と話していると聞いたことがあります。市長ですから、主張するのが当然です。県議員は、見解が違うんです。府議員はなんていうのか、不愉快ですか。そんなことを言っちゃあいけないですね。誰もが、全部スターなのです。それでいいんです、いい答え、成果が地域に残ればみんな幸せになります。汚かった川を、とてつもなく綺麗にする力を、皆さんはお持ちなんです。地域づくりとは、「まちを変える力」なのです。

活動の目標・指標を持ってまちづくりを展開

グラウンドワーク三島の活動目標の1番目は、「源兵衛川の水辺再生」です。

2番目は、もともとあった「三島梅花藻の復活」です。水温15℃で育つ水中花ですが、水質が汚くなれば、真っ赤になって溶けてしまいます。水温も0.5℃上がりますと真っ赤になって溶けます。繁殖していることは水温も水質も平常である証です。リトマス試験紙みたいな地下水の監視役、モニタリングの道具ともいえます。

静岡県による電線地中化の工事ミスにより、生コンクリートを源兵衛川に流してしまう事故が発生しました。調べ、確認したもので、約 1,700 匹の魚類が死にました。絶滅危惧種のホトケドジョウを約 500 匹以上殺してしまいました。この環境被害が、12 月 23 日に発生したのですが、当時の知事に電話して、この工事を中止してもらいました。この事故が、きっかけとなり、静岡県の公共工事では、川の工事について川に関わる環境 NPO に対して、工事内容を説明・協議し、NPO の同意と理解をもらわないと工事に着手することができない工事仕様になっています。

結果、川の工事を受託する業者は、最新の神経と配慮をして、河川工事に対応しています。今までは勝手気ままに川の工事を実施していたと思いますが、今では、かま場を作って、コンクリート車を持ってきて、バキュームで排水を吸い上げ、浄化して流さないと工事ができないようになっています。「ピンチはチャンス」とよく言われますが、そういう意味では、源兵衛川でのコンクリート流出事故が、土木の仕様書を変える絶好の切っ掛けになったのです。

3 番目は、「ゲンジボタルの再生」です。現在、5 月から 6 月には、延べ 1,400 匹以上のゲンジボタルが、源兵衛川を乱舞しています。

4 番目は、「実践的環境教育の実施」です。11 回、川の掃除をして、ヘドロを上げ、約 2,200 名、毎年小中高、幼稚園も含めて環境教育をやっております。子どもたちの水辺の遊びをやっております。

私たちは、自然環境調査をやっておりまして、市民運動がよく陥りがちな感情的な運動というのを一切やっていません。全て科学的に調査をしております。例えばボタルにつきましては 2 年前、毎日二人の方に歩いて頂いて、どこにどういう風に飛んでいるか、全部図面もあるのですが、僕は 10 年間の調査をしております。例えば、一番飛んだのが 90 何匹で 6 月の始めでおわかりだと思います。

ゲンジボタルの発生図ですが、少しピークの山がずれています。発生総数も 1,400 匹で前年度よりも 200 匹以上増えています。なぜ、こういうことをやっているかということ、市内の一斉清掃は 50 年間続いておりまして、これは 5 月初めの連休にやるんです。これは川に対してものすごいインパクトを加えています。魚の産卵期なのに卵を刈ってしまいボタルの幼虫が生息する堆積土・ヘドロを排除してしまいます。

この環境被害について、毎年、市長や農業者に説明しても中止を実現できませんでした。しかし、3 年前から、まず、源兵衛川から区間的に限定して中止してもらいました。その結果により、どのように生態系が改善されていくのかについて、自然環境調査を実施し、住民報告会で実態を知らしめています。現実的には、ゲンジボタルがこの 3 年間で、5 月上旬から 6 月中旬の間で、1,000 匹から 1,400 匹と 400 匹近くも増えました。全河川の一斉清掃を中止できれば、三島市内全域でゲンジボタルの飛翔が期待できると思います。

何故、行政は既成事実を中止、延期できないのでしょうか。その環境被害の事実関係を科学的に説明しても中止しません。この対応姿勢は、どこからくるのでしょうか、これだけ科学的に中止の効果を実証しているのに中止できません。河川清掃の意味や重要性を理解し、全面的に中止すべきだと言っているわけではありません。環境に悪影響を与えない 7 月以降に実施してほしいと、素朴に提案しているだけなのですが、慣行を重視する行政の軌道修正は困難を伴います。

ふるさとの森・松毛川河畔林の整備

グラウンドワーク三島では、7 年ほど前から荒廃が進むふるさとの森・松毛川の河畔林整備を進めています。この森には、1,306 本の樹木と 100 年以上の巨木が 132 本も存在しています。富士山からの湧水を水源とする農業水路の源兵衛川を 1.5 km 流れ下り、中郷温水池で温められた農業用水は、下流部の水田地帯にかんがいされ、最終的には、狩野川の旧川敷である松毛川に流入します。

とにかく、グラウンドワーク三島の活動の手始めは、ゴミ拾いから始まります。また、水質悪化の原因となるホテイアオイが繁茂したことから、これを、市民総出で回収・処理して水面を確保しました。

しかし、周辺の巨木は、次第に枯れていきます。特に、100年以上たったクスノキやハンノキの一部が枯れてしまった場所を1m50cmほど、土を排除して良質土と入れ替えました。その後、学生を中心として、地域住民とともに植林活動を始めました。また成長にあわせて、植林地の下刈りも定期的に行っています。植林後、3年ほどが経過すると、大きな森に成長します。非生産的な会議をしている暇があったら、植林の現場に行きませんか。会議後に、一杯飲みに行き、上司の悪口を言い合う暇があったら、資金的な協力をしてください。苗木は3年生、5年生の苗木を植えており、1本1,500円から2,500円します。しかし、高い分、成長も早く、新たな森づくりには効率的です。そういう意味では、お金を寄付していただくと、河畔林がどんどん拡大していくのです。

松毛川沿いの土手には、高さ20m近くの竹林が繁茂しています。この竹林の中に、多くの貴重な巨木が入ってしまっています。50年以上も間伐、管理していない竹林です。5年前より伐採を始めて、私も作業に参加していますが、ひたすら愚直に伐採作業を続けます。伐採した竹は全てチップ化して、肥料に活用しています。その効果により、植林地に雑草が繁茂せず、植林した苗木の活着率は99%近くです。

無駄に見える竹林は、実は、「資源」であり、有益な「肥料」になります。1本も無駄にしていません。全て、地区内で多様に活用しています。竹林に埋もれた巨木は、間伐後は、素敵な河畔林に変身します。このように、荒廃した河畔林を再生していきます。土曜日と日曜日を中心に松毛川に行き、河川管理者の沼津市と三島市の許可を得て、ひたすら、竹林を伐採して、竹チップ化し、土を混ぜ、ここに自然堤防を造成し、植林を繰り返していくわけです。すでに5,000本植えて来ています。企業とも連携して、活動を拡大・強化しています。

グラウンドワーク三島の活動の特性は、感情的な思いつきの市民運動ではありません。松毛川の場合、実施前に2年半かけて、この場所に、どのような森を作っていったらいいのかについて検討・議論してきました。地域住民との話し合いやワークショップを繰り返して、整備構想図を策定したのです。合意後には、1,500戸ある地域住民は、この整備構想図を承知しています。間伐と植林の具体的な活動については、今後とも、継続していきますし、ずっとやっていかなきゃいけない責任を担っています。最終的には、今後、10年かけて、この整備構想図のような素晴らしい「サンクチュアリ・ネイチャーパークの森」を創る目標を立てております。

儲けるNPOビジネスの経営と多様な市民活動を展開

グラウンドワーク三島は、「営利事業」と「非営利事業」を展開し、年間予算は約1億円です。非営利事業が6千万円、営利事業が4千万円です。三島街中カフェというお店を3店経営して結構儲けています。これらのお店で、15人・65歳以上のおばちゃんたち雇用しています。非営利事業には、11人の職員がいて、(株)パートナーシップトラストという会社にも出資し、あわせ、農業生産法人も経営しています。営利性・事業性の高いものは、この会社で対応しています。最大の株主が、グラウンドワーク三島です。

今まで、幼稚園・小学校・高校にビオトープを、学生とともに4か所造成してきました。また、三島梅花藻の里として、ミシマバイカモの増殖基地を造成しました。2年ほど前、この里の上流部の水源地が突然不動産屋に売却されてしまいました。そこで、この貴重な土地を保護・保全すべく、買い戻しの市民運動を始めました。私たちが了解していない間に突然、造成工事が始まったので、体を張って工事中止させました。その後、約1万人の署名と300万円の募金を3か月の短い期間で集中的に集めました。

その成果を持って、三島市長に三島市による買収を陳情し、議会の同意も取り付け、三島市による土地買収が、5千万円の予算計上により、水源池の買い戻しが実現しました。現在、グラウンドワーク三島が、募金とともに助成金を確保して、この水源池の整備工事を実施しています。

世の中には、社会性があれば望んで実現できないことはありません。絶対に必要とされる重要事項は、市民力を結集すれば、その夢の実現は可能です。正論は、多分、行政も政治も理解してくれます。ですから、主張すべきものは主張すべきです。正直嬉しかったのは、「グラウンドワーク三島、頑張っているよね」と、90回近く開催した街頭募金の時に多くの市民が声をかけてくれました。これもNPOの評価の指標の一つではないと考えています。

グラウンドワーク三島は、この活動を展開する際、感情的に、この水源池を買ってほしいと一方通行の要求をしていません。論理的に説明していきます。その一つの手法として、ここに三島の駅があって、小浜池という水源池があり、そこからの源兵衛川があります。ここは散策できます。しかし、現実的には、終点まで行けば戻ってこなければならず、回遊ルートが未整備なのです。今回、ここを整備することにより、隣接する御殿川をさかのぼってくる、新たな回遊ルートができあがり、水辺と森、街中が一周できる回遊性が高まります。そのまちづくりの企画書・整備案を策定し、三島市長や議員に提案しました。

境川・清住緑地・大湧水公園の整備計画を提案

17年前から住民主導の管理運営を進めて来たのが、境川・清住緑地です。素晴らしい森と湧水池があるのですが、隣接地の養鱒場が民間企業に買収されてしまい、埋め立てられてしまいました。そこで、ここでも、この大切な湧水池を買い戻そうということで市民運動を開始しました。

三島市と清水町にまたがる約1.3haの土地・谷地田であり、ここを民間企業が、約1億3千万円で買収したのです。そこで、約1億3千万円で買い戻そうと、双方の首長を説得しました。三島市は平成27年11月に、三島市側の区域を買収しました。現在、清水町が残りを買収すべく調整を進めています。今後、市民総参加による水の郷検討委員会の議論を踏まえ、約4haにわたる大湧水公園の整備計画の実現を進めていきます。グラウンドワーク三島で基本構想図を描き、地域住民との議論を踏まえ、合意形成を図ったものです。ですからNPOはまちを変えられないとか、大きな仕事ができないなんてとんでもない話です。静岡県知事は、2回もここに来てくれていて、静岡県の土木事務所が工事を担うべく、川の改修と一緒に周辺整備をしようということが決まっております。

大場地区里山整備計画を提案

荒廃が進む桜山と耕作放棄地の田んぼの整備を進めているのが、大場地区の里山整備です。この山の中には、古くからの農業用の掘削井戸があり、田んぼの重要な農業用水源になっています。ホタルも、数千匹も乱舞しますので、ここを守ろうと、荒れ果てた里山を間伐して、昔の桜山を再生すべく、3年前から整備を進めて来ています。

儲かるNPOビジネスを展開

営利事業の一環として、NPOビジネスを積極的に展開しています。廃屋化し、お化け屋敷状態だった、店舗を改修して、グラウンドワーク三島が、耕作放棄地を活用して生産した各種の野菜やお惣菜を販売しています。1日8万円くらいを売り上げています。お年寄りにお化粧をして頂いたり、きれいなものを着てもらおう衣料用品店・ゼロゴウメも経営しております。

また、源兵衛川沿いに「せせらぎ源兵衛」という、三島コロッケやかき氷などを売るお店も経営しています。1日、3店で、10万円程度の売り上げがあります。働けばお金が入る、知恵を出せば、儲ければ、給料が上がる、非常に単純な理屈・ビジネスモデルを作って、職員の皆さん、日々、頑張っています。

皆の力でまちを地域を元気に

お話ししたいことはいっぱいありますが、この位にさせていただきます。最後に、皆さんへのメッセージとしては、私も今も走りながら、試行錯誤に明け暮れていますし、怖くて後ろを振り向けません。毎年の運転資金が確保できるのか、職員の給料が払えるかなど心配は尽きません。正直 24 年間もよくやってこられたなと思っております。本当にいろいろが不安です。

しかし、人ができなかった、有意義な事を成したという自負はもっております。一人では、絶対にできません。しかし、物事は、一人から始まります。大いなる覚悟を持って頂き、しかし、覚悟を持つと固い雰囲気になっちゃうんで、いい加減にやっていく、そして、私が県庁時代 38 年間で、覚えた最大のテクニク・死んだふりを学び、対応して行ってください。

怒ってみたり、声を荒げたり、人と喧嘩をしようとしたり、悪口を言っている、NPO がいたとしたら申し訳ありませんが、その組織は 3 年位で崩壊すると思います。人の悪口を言うと、必ずブーメランのように回ってきて、自分の所に戻ってきます。足元が砂上の楼閣のように崩れていきます。

私はたくさんの NPO を見てきていますが、多くの組織は、内部的な些細な誤解や批判、悪口で、組織は脆弱化し崩れていきます。これらの事実と経験も、NPO の人間修行ですので、弱者、敗者という意味では、社会のウィークポイント・人のウィークポイントの関係になります。

自分もそんなに強い人間ではないので、お互いが、支え合いながら、楽しい人間的な世界を、思いやりのある世界を作っていくことが大切です。そういう意味では、普段の時に助け合いの連携軸を地域に作っておけば、災害時に、必ず助け合いの仕組みが機動して、役立つことは間違いありません。一種の防災対策上の先行投資であり、行政の力にも限界がある中、皆さん自身で、自分の地域を守るセーフティネットを創るのです。

今後とも、公益的な市民活動を継続していただき、苦勞を重ねて頂ければと思います。必ず、素敵で安全なまちができあがります。努力を続けてください。

●NPO法人グラウンドワーク三島 ホームページ

<http://www.gwmishima.jp/>